

追憶 林文子先生

## はつらつとした研究者としての林文子先生の思い出

玉木 長良

私の記憶の中にある林文子先生は、若くはつらつとした女性研究者です。私の父が岐阜大学医学部（当時は岐阜県立女子医学専門学校でしょうか）に勤務していた頃、父の元に卒業生で熱心な研究者が出入りしていました。放射線医学研究を志して勉学に励んでおられた林文子先生です。

昭和32年に家族皆で長崎に移った後も、林先生は長崎の父の元を何度も訪問されていました。私たちの住む家に来られたこともあります。私はまだ小学生だったので、ごく記憶の一端に残っているだけでしたが、よくお話をされる元気な女性のイメージでした。父もかなり話好きでしたが、父が1話す間に林先生は9を話しておられました。岐阜におられて博士号取得のことも含め、いろいろな研究の相談をされに遠方まで出向いてこられたのだと思います。林先生はよく「私はおしゃべりだから、、、」と言葉の端々に語られていました。放射線医学のことに加えて世間話もよくされ、楽しく拝聴させていただきました。後日、林先生が健康科学文化振興財団を設立されたと父は感心して語っていました。その成果として本誌「健康文化」があり、その雑誌が50号を迎えられたことを、うれしく思います。

父の遺品の中から大昔の父と林文子先生のツーショットの写真を見つけました。昭和27年関東甲信越地方会において上高地で撮られた写真だそうです。若い研究者としての林文子先生のお姿を大切に心の隅にしまっています。



(北海道大学医学研究科・核医学教授)